

山 原 体 験 記——沖縄人文研修報告

青 柳 寛 (監修)

目 次

序説—研修の位置づけ (青柳寛)

論考

うちなーぐちの温かさ (沖田朋子)

山原研修に参加して (櫻脇美沙)

基地問題 (沢本久美子)

米軍基地問題 (藤原靖世)

編集後記 (青柳寛)

参照資料

研修の基本的心得

研修の日程と経費

Images from the Field

研修の位置づけ (青柳寛)

自己紹介の場で自分が某大学でアジア学を教える者であることを説明すると、「アジア学って一体何ですか?」と首を傾げて尋ねられることがよくある。所謂「地域学 (regional studies)」の一端としてアジア学は欧米のアカデミアで成立してきたのだが、未だそれが「学」として定着しているとはいえない日本においてその内容がピンとこないのも無理はないであろう。こんな質問を受けた時、かつての私は「アジアについて色々勉強する学問分野です」と答えていた。しかしこの曖昧な回答が、いつの間にか「アジアのことなら何でもありの、わけの分からぬ万屋学問」といった半ば軽蔑じみた印象を幾人かの人々に与えてしまっていたことを最近深く反省させられた。

アジア学というのは、異文化理解の仮初の姿に過ぎないと私は考えている。それは、文化人類学、社会学、歴史学、文学、宗教学、政治経済学、あるいは経営学といった学問分野が「アジア」という「想像の共同体 (?)」に係わる各種の問題にとり組むべく集まって出来上がったハイブリッドな領域ということが出来るかもしれない。されば、必然的に裾野の広いものではあろうが、これがあたかもバックボーンのない「何でも屋」であるが如く語られるのは遺憾だと思う。そして、文化人類学的探究を担う立場にある自分がアジア学に求めるのは、「人間学のアジア地域への応用」に他ならない。

アジア各地の人々の生き様を慎重に検討し、そこに見出される文化や社会の諸相、ひいては人間のあり方について色々と考え、それらに鑑みて自分自身のあり方を開拓していく学術的道程、こ

れが私の思う「コミットメントの学」としてのアジア学である¹。

星の数ほどいる人々の中から何らかのきっかけでこの「アジア学」の旗印の下に集まって自分と縁を持つことになった学生たちには、異文化理解の手法を学習し、フィールドワークを通して特定の生活世界を体感し、これらをバネとして自文化とその中に位置づけられている自分自身のあり方について反省的な考察を施すよう指導している。今回そんな学生たちの4名が沖縄本島北部の山原（やんばる）地方に赴き、2005年春のゼミ研修（2月25日～3月3日）に参加した。「参加した」というより、この研修を自分たちの力で実現させたといった方が妥当だ。

この記念すべき第1回山原研修の構成員はしかし、いずれもこれまで観光の域を超えたレベルでうちなんちゅ（沖縄島民）の生活世界に立ち入ったことはなかった。しかし、だからこそ新鮮な目で、自分たちの持ち合わせた偏見に対しても素直な形で、うちなんちゅの生活様式を見学してることが出来たようだ。私がこの4名の学生に勧めたタスクには、1）うちなんちゅの生き方を参与観察すること、2）現地でとる自分たちの行動を省みながらフィールドワークのコツを掴むこと、そして3）自分たちの面前に現象として現れる沖縄文化の諸相を鑑として、自分たちのあり方や生き方を哲学することが含まれた。4名の学生たちはこれらの作業を積極的にこなし、そこから彼女らなりに多くの発見を得てきたようだ。

ここに編んだ報告書は、この研修成果の一部を表象するものである。これをお世話になった山原の皆様へ捧げたいと思う。また、この報告書が同様の研修を自らの手で開拓せんと欲している後輩たちの参考になれば実に幸いである。とはいえ、決して出来栄のよいものとはいえないかもしれない。これを読んだ後で、とるに足らないものだったとお笑いになるかもしれない。

住み慣れた地元や知り尽くした自文化について都合よく語るのは容易なことだ。異文化を勝手気儘に観光し、見たい部分だけ見て主観的な解釈を施したあげく、ポイ棄てするのはたやすいだろう。たとえ現地に赴いてそこに暫く滞在したとしても、異文化理解の基本的な姿勢が誤っているのは本当の意味で地域学習をしてきたとはいえない²。一方、研究対象となる地域社会にこれまで全く触れたことがなくても、その中に入ってフィールドワークを実施し、その文化的諸相に学術的にサウンドな分析を施していくのは至難の業である。このような探究を試みること自体とても尊い行為であると思う。今回山原に赴いた4名の学生たちはこの作業を少しでも実践しようと頑張った「研究者の卵」たちであり、ここに編んだ報告書は彼女らと現地の人々との一期一会の交流を記念するものである。ここでは、彼女たちが観察した色々な事象の中から、特に自分にとってチャレンジングな課題に敢えて焦点を当て、それについて反省的なエッセイを書いていただいた。そしてこれを私が評し、今後の展望を提示する形式をとった。

この研修のベースキャンプとなる場を提供してくださった島袋T家の皆様、異文化理解の大切さを考慮しながら充実した見学プログラムを樹立してくださった宮里K先生、珊瑚礁を窓口とした海

1 異文化理解を通して自文化のあり方を探究するというスタンスはマーガレット・ミード（Mead 1978）が提唱したもので、ここではこのスタンスのアジア地域研究への応用性を指摘してみた。

2 この点についてはStrathern（1987）、Whittaker（1992）などを参照せよ。

洋生態系の学習ワークショップを開催してくださった仲村S先生，研修バックアップの大黒柱となってくださった新川H家の皆様，そしてこの研修について聞き及び，わざわざ遠方から駆けつけて参考になる数多くのアイデアを提供してくださった「山原ゆんたくサークル」のどうしぐわーの皆さん，いっぺえにふえーで一びたん！本研修は，これらの人々の協力があってこそ実現出来たものだった。

文化人類学の研究には倫理的な配慮が責務として伴う。この報告書に関していえば，登場する固有名詞は一部の公共機関の名称を除いて全て仮名を用いた。

うちなーぐちの温かさ（沖田朋子）

今回の研修で初めて沖縄を訪れ，ある村でお世話になった。この村は沖縄本島の村々の中でも伝統意識の強い村で，言葉に関しても伝統的な言い回しが，特に年配者によって頻繁に使われている。そしてここで耳にしたうちなーぐち（沖縄語）には人間同士の思いやりを示す表現が多いことに気がついた。

まず，「ありがとう」という意味の「にふえーで一びる」や「頑張れ」という意味の「ちばりよー」がとても頻繁に使われることに驚いた。何か人のためになることをすれば，それが大したことなくても「にふえーで一びる」といい，特別大きな仕事をするわけでもないのに「ちばりよー」といわれる。あまりこれらの言葉を交わさない自分の生活世界を省みれば，これらの表現が村の中で使われる頻度には新鮮な驚きがある。

また，現地では「かめーかめー攻撃」というものがある。これは「噛め噛め攻撃」を意味し，お客さんや愛する家族へのもてなしの大切さを象徴している。客人として村の家々を訪れると，決まってありったけのご馳走を出して，「食べれ！」といってくれたりする。中でも特に印象に残ったのは，お世話になった家のお母さんの「ちゅはらうさがみそーれ！」という表現で，客人である私の健康を祈って「お腹いっぱい召しあがれ」という意味で使われたものだ。これを聞かされた瞬間，お母さんのいたわりの心がとてもよく示されていると感じた。

現地で耳にしたうちなーぐちには心配やストレスを解消する癒しパワーを感じられるものも数多くあった。例えば「なんくるないさー」という表現—これは「なんとかなるさー」という意味で，自分が不安になった時，それを察した相手が事情を聞き，使ってくれた。現地のインフォーマント（20代の娘さん）に尋ねた結果，これはむしろ「くよくよしていてもしょうがない，何とか出来るよー！」という励ましの意図で使われることが理解出来た³。なお，「～しましょうねー」という表現も頻繁に使われ，これは自分の意志を伝える表現であるにもかかわらず，まるで相手と一緒にことを行おうと誘っているような言い回しをする。でも，よく考えてみると，「～する」といった個人的な断定よりもっと相手の同情を促す愛嬌のある表現だと思われる。

3 タイにも良く似た表現があった。何かに悩んでいると，周囲の人たちに決まって「マイペンライ」といって笑顔で励ましてもらった。

今ひとつ村の生活の中で頻繁に聞かれた表現は「だからよー」である。これは話す相手に相槌を打つ意味で使われる。日本語の「そうだね」に当たる表現だが、特に相手が文句を言っている場合、効果的に使われた。その相手と必ずしも同意していなくても、「だからよー」と言って同調するという、配慮のこもった表現らしい。

こうしてみると、うちなーぐちは、うちなーんちゅ（沖縄の人たち）の人の良さや心の温かさを最大限に引き出すスパイスのような役割を果たしていると思う。そして私が体験した地域のうちなーんちゅは、こんなスパイシーな表現を維持することによって人間味溢れる自分たちの地域文化を大切にしているのだと強く感じる事が出来た。

山原研修に参加して（櫻脇美沙）

今回の研修で沖縄に行って何よりも感じたのは「人の温かさ」です。「もてなしの文化」といわれている沖縄の文化の根底にあるもの、それが私の感じたうちなーんちゅ一人一人のあたたかさだと思いました。

今回沢山の人の協力や援助を得て私たち研修生は色々な体験が出来ました。特に感謝したいのが、私たちの宿泊や食事など細部に至るまでお世話をしてくださったS家の皆さんのもてなしです。私はなぜここまでよくしてくれるのか疑問に思いましたが、帰ってきてそれが良く理解出来ました。

というのも、私が普段学校通いやアルバイト用に使っている電車に乗った時、沖縄で乗ったモノレールのことを思い出したからです。私は沖縄から帰る日に那覇市内から空港までモノレールを利用しました。大きなかばんを抱えて乗ったその電車は席が軽くうまる程度の混み方でしたが、席が埋まることはなく、二割程度の人が立ったままでいたのです。私はそんな人間的余裕に満ちた沖縄の乗客の様子を、当初は特に気にも留めずにいいましたが、沖縄から戻ってきてその様子が当たり前ではないことに気がつきました。

もしかしたらたまたま私が乗った電車がそうだっただけなのかもしれませんが、私が普段東京で利用している電車には、降りる人を最後まで待つ間もなく我先にと座席めがけて一目散に駆け込み、足や体が当たろうと靴を踏もうとおかまいなしです。優先席にも平気な顔をして座っている非該当者も数多くいます。私の解釈の仕方に偏りがあるのかもしれませんが、沖縄での電車内の様子は、こんな内地の都市部の状況を背景にして考えると、どう見ても他人を気遣う人の気持ちが自然とにじみ出ているように感じられました。そんな様子を観察して、私はこの電車の状況がそのまま地域の社会性が表象されているという点を、S家の心温まる歓迎の文化的な根拠を理解することが出来ました。

話が逸れるかもしれませんが、沖縄で強く感じられたことのひとつに「平和への祈り」があります。それがよく観られたのがひめゆりの塔ですが、本土決戦の悲惨さを物語った象徴的な場所です。また、沖縄には今も世界大戦の代償でもある基地が存在します。日本全土にある米軍基地の7割以上が沖縄に集中している中で、私が出会った沖縄の市民は皆一様に早い軍縮と平和の保障を望んでいました。そして、平和を思うということは将に他人を思うことであると思います。

私たち大和の人間がいくら平和を願っていると口でいっていても、電車の状況からも分かるように殆ど自分のことしか考えられず、とても平和を祈る余裕が心にあるとは考えられません。そんな状況の中で暮らしてきた私も、現に今回の研修に参加するまで沖縄で起こっている基地問題についても何の実感も持っていませんでした。沖縄が自分の暮らしている日本の紛れもない一部だとするのなら、私は自国であるにもかかわらずそこで何が行われてきたかも知らなかったということになります。

そしてこういった問題は私だけのものではないはずです。沖縄といえば、本土にいる私たちには青い海や南の楽園といったイメージしか伝わってきません。皆見たくないものや都合の悪いことには知らん振りです。電車の中のちっぽけな出来事も、ある意味で世界の縮図であると私には思われます。同じ構図で、自国の利益だけを考えた政策がなされ、他国がどんな悲惨な状況にあっても見て見ぬ振りをするような状況が続く限り、まして自国を有利にするために他国を落とし入れるような状況が続く限り、平和な世の中なんてやってこないと思います。

沖縄で見た思いやりの精神は、今の世界に欠かせない大切な意味を持っていると思います。他人を気遣うのは些細なことかもしれませんが、世界が平和になるためには欠かせない人間の基本的な姿勢です。私は少しでも多くの人にこの沖縄文化の一部をなす素晴らしい理念を伝えていくことが、世界の平和にも必ず繋がっていくと信じます。

基地問題（沢本久美子）

沖縄には日本の米軍基地の約75%が集中している。基地は市街地と隣接している所もあれば少し離れた場所に広がっている所もある。今回の研修で自分が過ごした村の傍にも基地があり、そこから聞こえてくる機関銃の演習音は日常とかけ離れた不思議な音に聞こえた。自分が通っている東京の大学付近にも米軍基地があり、戦闘機や軍用ヘリコプターの騒音は授業が出来なくなるほどのうるさい。沖縄の人々はほぼ毎日こんな騒音の中で暮らしているのかと思うと胸が痛む。

基地からの被害は騒音だけではなく、有害廃棄物の垂れ流し、演習による公道の通行妨害、あるいはまた米兵による暴行事件などがある⁴。2004年8月13日におきた沖縄国際大学での米軍ヘリ墜落事故も記憶に新しく、基地の安全性が疑問視されている中で、新たに基地を建設する動きが出ている⁵。受け入れ先となっている辺野古にある建設反対座り込みテント村で代表者の方々から貴重

4 暴行事件の中でも1995年に起きた小学生暴行事件や2001年に北谷町で発生した女性暴行事件は大きく報道された。しかしこれ以外にも、兵士による民家への侵入やハラスメントは頻繁に発生している。

5 本島中部の市街地に位置した普天間基地はかねてからその危険性が指摘されていたが、2004年の8月13日14時ごろ、ついにその危険性を実感させる事件が起きてしまった。普天間基地から飛び立った米軍ヘリコプター（CH53型）が隣接する宜野湾市の沖縄国際大学のキャンパスに墜落し、大破した。乗組員に負傷者が出たらしいが、米軍はすぐに現場にやってきて包囲網を作り、警察やメディアをはじめとする日本側の視察を拒んで通さなかった。幸い大学側や市民の側に負傷者はなかったが、この件で普天間移設計画は一気に進展することとなった。

なお話を伺うことが出来た。

今回、新たな基地建設地が沖合であるため基地本体を含め約207ヘクタールもの埋め立てをしなくてはならず、これが実施されれば取り返しのつかない環境破壊を齎す。沖縄戦を体験した方々は「海がなくなると食料がなくなる」ということを危惧されている。戦時中の食糧難がどのようなのか身をもって感じているからこそ、「人殺しを促す基地建設がいかに深刻な問題であるか」もよく理解出来るのだ。日本政府側は反対派を沈静すべくいくつかの懐柔政策をとっていて、テント村近くの専門学校や情報センターはその一環として建設されたという。この他、反対派と建設促進派の間のぶつかり合いやマスコミとの複雑な関係など、色々と話を伺った。

研修中の休日、ある米軍基地の内部を見学することが出来た。キャンプ内の寮は無人のところが多く、電気はついておらず閑静としていたが、ビーチ近くではビールを片手に大勢の米兵がくつろいでいた。そして基地内の見学で傍を通りがかった私たちに対し、まるで慰安婦を見るような視線を注ぎながら不気味な歓声を一齐に発した。基地というと軍事訓練ばかりしている場というイメージが強かったので、図書館や映画館、ショッピングモール、プールにテニスコート、ボーリング場、そしてフードコートなどの娯楽施設が併設されているとは思わなかった。フードコートにはピザ、ハンバーガー、アイスクリームなどのジャンクフードの売り場が並んでいるのにも驚いた。キャンプを出る際、ゲート前で付近の住民がキャンドルライトを手に持ち、無言の抗議運動（サイレントキャンドル）を行っていた。初めて観たこの光景は何ともいい難いものだった。フェンスを隔てて隣接する基地の内側と外側の溝はとても深いものだった。

米軍基地の問題に関しては未だアメリカと日本の政府、そして沖縄県民の間で色々と議論されており、どんな結論になるか分からない。しかし、人々の平穏な生活を第一に考えるなら建設を進めるのは良くないと思う。市民の生活を脅かし、生活環境を破壊する行為のどこが安全保障だというのだろう。日本政府も「説得」や「妥協案」の名の下にこれ以上沖縄県民に負担を課し、日本国民の負担を重くしてはならないと切に思う。

米軍基地問題（藤原靖世）

私は夜中に那覇空港に到着した。着陸の時窓から島が見えた。島が見えたというより、なんとなく島全体がほのかに明るい感じがしたのだ。後で米軍基地問題に触れたとき、この上空から見えたほのかな光のことが思い出された。

日本は戦争で米国に負け、戦後は米国の支援の下で復興した。そして終戦直後に結ばれた条約に従って日本に米軍基地を設け、その管理権を米政府と米軍部に譲ることにしたのだった。これ以来現在まで、沖縄には38もの軍事施設が出来、本島の面積の19%に及ぶ広大な土地を米軍が占領する結果となった。また、離島にも訓練場として利用されているものが多く、空域の民間利用制限も陸地に勝るとも劣らない⁶。

6 詳細については <http://www.cc.u-ryukyu.ac.jp/~kameyama/SituationOkiBase.html> を参照せよ。

本島の中でも普天間基地は航空隊のベースとなっているが、その周辺の学校では騒音などの被害で授業が出来ないような事態を招いている。地元市民に対する政府からの「思いやり予算」によって学校や民家には防音用の窓ガラスが配備されているそうだが、これによって一年中蒸し暑い沖縄の環境では、室内の冷房完備施設が必要になったりして、環境への長期的影響を考慮に入れると事態はかなり深刻である。また、普天間飛行場内で航空機が墜落するという事件も過去に何度も起きており、この飛行場に隣接する沖縄国際大学のキャンパスで2004年の8月に起きたヘリ墜落事件も、普天間エアーベースの危険性をよく物語っている。

市民の生活に害を及ぼすということで普天間基地の移設計画が平成11年から持ちあがっている。そして、名護市辺野古村の沖合が移設先の有力候補になっているが、沿岸部に近いので、地域の安全性が保障されないという点で問題化している。また、辺野古沖の珊瑚礁を崩して長さ2500メートル、幅600メートルの滑走路（政府は軍民両用を謳っている）を建設するため、取り返しのつかない環境破壊が齎されることになる。辺野古沖合は絶滅の危機に瀕する特別天然記念物のジュゴンが生息する日本唯一の海域でもあり、滑走路の建設がジュゴンの生活圏をも奪ってしまうことも必至である。

一方、基地の移設にかかる費用は莫大なものである。辺野古に限っていえば、海域のボーリング調査を事前に行う必要があるが、これだけでも約9億円の経費がかかってしまう。更に基地本体の建設費は推定で1兆円は下らない。これらの経費は、条約で定められている通り日本国民から集めた税金が当てられる。現在使われている米軍施設の経費も全て日本が税金を使って支払っているのだ。また面白いことに、普天間に代わる施設の使用期限を15年としているが、辺野古に新たに基地を建設するのに15年近くかかるそう。膨大な経費をかけて建てたにもかかわらず、施設が完成して間もなく基地の使用期限が過ぎてしまうというのは納得のいかない話である。

今回辺野古で基地反対運動の関係者にお話を聞き、また自分でも基地移設地の見学や背景調査を行って、やはり生態系や市民の生活環境に対する十分な敬意を払わないまま建設が強行されることには反対だと確信した。私が今回の研修で一番考えたことは、辺野古沖の豊かな自然や沿岸にあるのどかな村々を壊してしまうということが反人道的であり、こうした行為に口実を与える「日米安全保障条約」のあり方がとても疑わしいということである。現代都市で比較的裕福な生活をしている我々は気儘に建物を建てたり壊したり出来るが、ひとたび人間の勝手に壊された生態系が元通りになるためにはとてつもない時間と生命のエネルギーが必要なのだ。この意味でも生態系を崩すというのは取り返しのつかない行為だということがよく理解出来た。

色々書いてみたが、全ての自然生態系が均衡を保つように出来ているとするなら、人間は自分たちの目先の利益ばかり追求しながら動くのではなく、もっと何十年、何百年も先のことまで念頭に入れ、子や孫たちの世代までしっかりと維持出来るような生活環境を構築していくべきだと思う。

編集後記（青柳寛）

上記にまとめた研修生たちのエッセイは、生活文化と基地問題という2大テーマに分かれるが、

どちらも自分が現地で住民と接触しながら感じとった事柄や、住民と日常生活を共にする中で得られたデータを基盤として作成された民族誌的なレポートであるといえよう。学術書やマスコミ関係記事からは得ることが出来ない論点が提示されている。ではこの各々について、その長所と今後の展望を指摘してみたいと思う。

沖田論考はうちなーぐち（沖縄の方言）に数日間係わった研究者の率直な感想をベースに、言語と地域文化とパーソナリティーの間の相関性を読み解こうという試みである。日本語には類を見ないもてなしや励ましの表現に、人間性や協調性を大切にするうちなーんちゅの文化的な豊かさがよく洞察されている。また、タイでよく使われる表現を手がかりにした文化比較も興味深い。

しかし、この論考の各所に印象を超えたレベルでの地域文化のクリティカルな考察や事情分析が要求される。沖田の論説には、あたかもうちなーぐちそのものに人柄の優しさや温かさがにじみ出ているかのごとく論じているようにも解釈できる部分があるが、これは類型論に貢献する危険性を孕んでいる。うちなーぐちに人を罵倒するような表現はないのか？美辞や賞賛の表現は沖縄に限らず、人をもてなすコンテクストにおいてどこで見られても当然ではないのか？うちなーんちゅの優しさや人間的豊かさの文化社会的ないし歴史的根拠はどこにあるのか？また、うちなーぐちには歴史的に観て、多くの日本語（やまとうーぐち）が混在しているが、両者とそれに表象される沖縄文化と大和（内地）文化はどのように関わってきたのか？読者はこの論考を読み進んでいくなかで、こうした質問を出さずにはいられない。「うちなーんちゅ＝優しい人たち」といった偏ったイメージを避ける意味でも、うちなーぐちの使われ方、即ち文化的実践としての言語表現（パロール）に関するより発展的な検討が今後期待される。

櫻脇のエッセイは、電車内の人間関係というさり気ない日常シーンの地域的な格差を手がかりに、人間のあり方という哲学的なテーマを探究している。世界の平和につながる思いやりの心は、かつて「日本」で唯一戦場と化し、人間同士で争い合うことの悲惨さを体験した沖縄の人々によってこそ育まれ、その心は現代の日常生活の中にも見出すことができると櫻脇は指摘する。うちなーんちゅたちの育む「もてなしの文化」が、真心や人間性をいかに大切にするものであるかが研究者の鋭い感性を用いた体験談として淡々と語られている。もてなされる側の育った「自己中心型の社会環境」がために、心からのもてなしを沖縄で受けた際について懐疑的になってしまったという自省的な観察も実に新鮮で面白い。

この論説に取えて今後の課題をぶつけるなら、沖縄のもてなし文化の所以について、うちなーんちゅのインフォーマントへのインタビューや文献調査を交えながらもっと探究して欲しい。もてなしの心は、文化交流の拠点として古くからあり続けてきた沖縄に生きる人々の知恵であり、また誇るべき伝統ではないのか？それとも豊かな自然とのんびりした生活環境が産出した人間の基本的態度なのか？他の地域（例えば本土の一地方であるとか、東南アジアなどに見られる同種の精神ないし表現行動）においても同様の地域的な人間性が成り立っているのではないのか？こうした民族学的な問題点を発展的に論じていていただきたい。

沢本論考は第二次世界大戦後の沖縄を特徴付けてきた米軍基地問題を、庶民的な立場からクリテ

ィカルに吟味したものである。沖縄の基地問題に関して各種の重々しい議論が政界や学界、あるいはマスコミの世界に飛び交う中、研究者が基地建設現場で行ったフィールドサーベ이를ベースにとりまとめた民族誌的なヴィジョンには、地域住民の生の声と自らの感想がうまく交錯させられており、現実味を帯びた論説として読者を惹きつける。基地内部の状況観察を基地建設反対派の観点と比較しながら論じる手法も説得力に満ちている。

今後の課題としては、基地問題に関する重々しい言説（政府の声明や行政文書、マスコミ記事など）の部分的引用や統計的なデータを駆使した論の強化が期待される。また、辺野古の基地反対運動の代表者たちが提供して下さった貴重な情報に関しても、より詳細な分析が求められよう。基地反対派と推進派との間のぶつかり合いはどのような形をとるのか？反対運動の内部では、どのような戦略が練られ、どのような人間関係が展開しているのか？「マスコミとの複雑なやりとり」とは一体何なのか？読者がある意味で最も注目するこれらの論点が放置されたままになってしまっている。更に興味深いのは、マスコミにもめったにフォーカスされない日本側の米軍（または米政府）に対する「思いやり」のあり方とその社会的影響の問題であったり、基地の運営によって潤う地場産業の事情であったりするが、こうした点に少なからず現地で触れてきた以上、出来る範囲でこれらに関する探究の可能性と限界についても反省的に言及して欲しかった。

藤原論考は、一見して現地の人たちの生の声が見当たらないドライなエッセイのように見えるが、その実地域住民が直面する問題と著者の観察や体験、そしてこれらを規定する基地問題の特徴がよく吟味された作品である。基地建設に絡んだ地域特有の問題点と、それに直接関係ない立場にある者が共有できる（あるいは共有すべき）より大きな社会問題（環境保護や維持的発展など）との接点が説得力ある形で提示されている。かくして辺野古沖のジュゴン、我々東京で学問する者たちにも切実な形で「生命への畏敬」を訴えかけ得るのであり、自然生態系の大切さは、山原を遠く離れた都市部でも同様の重みを持ち得るのである。今後はこれに更に磨きをかける意味で、現地の生態系事情や基地問題の歴史的変遷に関する詳細な参照データを収集していただきたい。

総じて物足りなさは所々に残るものの、4つの論考はその各々が個性的な洞察に満ちている。「アウト・オブ・キャンパス主義 (Out of Campus Doctrine)」に従い一週間に渡ってゼミ単位で行った研修が、観光などによって醸し出される定番のイメージを超えたレベルで研修生たちの沖縄の文化社会に関する理解を深められたのは喜ぶべき成果であったと思われる。

研修の基本的心得（参照資料1）

- 研修前の配慮：研修に選ばれた者として研修先の地域情報（この場合沖縄の文化社会的、歴史的、そして政治経済的背景）を事前に出来るだけ把握しておくことは大前提です。何も予習せず、考えず、無関心に研修先に赴くことがあってはなりません。予習が出来ておらず、研修の基本的態度にも問題があると判断される場合、研修を辞退（中途を含む）していただくこともありますのでご了承下さい。
- 研修先での配慮：本研修は好意をもってホストをして下さるうちなんちゅ（沖縄の人々）との深い信頼関係の上に成り立っています。この信頼を失わないよう、研修の全行程において研修生は誠意ある行動をとり、エチケットを守るよう配慮しなくてはなりません。またオープンハートなゲストとして

も、心温まる人間づきあいをするよう心がけて下さい。人として振舞うとはどういうことなのか考察し、地域特有の行動規範について分からないことがあればよく尋ねながら行動して下さい。

- 遊学ということ：本研修でとるアプローチの中核をなすのは「遊学」ですが、これは楽しみながら学んでいくことを意味します。この場合の「遊」はハメを外してふざけることではありません。現地の人々との交流を大切に、先方にも自分との交流を楽しんでいただけるような快い雰囲気を常時構築しながら、現地のライフスタイルを把握していくという姿勢は終始一貫保ってください。本研修はまた、某観光会社が企画するパッケージツアーとは訳が違います。卒論研究やライフワークといったものを視野に入れたフィールドワークを実践して下さい。
- ノートテイキング：研修中フィールドノートと日記は必ず作成して下さい。そして、そのための時間を一日少なくとも2時間程度は設けて下さい。出来上がったノートは研修後編纂の上、レポートに添付して青柳まで提出して下さい。レポートは読者（現地の人々も含む）を十分に意識したクオリティワークに仕立てあげて下さい。
- 反省的学習：異文化理解の方法論を把握するという意味では、本研修は現地での交流体験を通じて自分自身の持つ先入観を吟味する学習課程でもあります。博物館でものを見ているようなクールな視線を捨て、相手との積極的な係わりを通じてお互いの持つ偏見についても語り合い、有意義な交流を図ることが大切です。
- 謝礼：現地の状況をよく考慮しながら、お世話になった人々に感謝の意を表します。ただし、品物や礼金を渡すだけが感謝の表現であってはなりません。また、多い少ないに係わらず、「一方的で異常な」謝礼には意味がなく、かえって相手に失礼になってしまいます。バランスがとれ、相手に充分気持ち伝わり、お互いに満足出来る形での謝礼の形式を編み出して下さい。
- 研修後の責務：ホストは普段他人に公表することのないプライベートな部分を多分に含む自分たちのライフスタイルを披露して下さい。先方の人格の尊厳とプライバシーへの配慮は研修中の全工程で厳守するのが研修生の義務です。「友達になった」という錯覚に陥って迷惑をかけることのないよう留意して下さい。文化人類学には、フィールドワーカーが果たすべき基本的責務として次の3点があります：
 - a) 研究目的外で故意気配にホストの生活空間を侵さない（程よい距離を終始保つ）
 - b) 係わった人々や地域の固有名詞、個人情報などはしっかりと管理する（フィールドノートなどには仮名や暗号を利用する）
 - c) レポートや論文に関連情報を掲載する際は充分配慮し、プライバシーや知的所有権に係わる情報の掲載が不可避な場合はその可否を該当者と十分に検討すること
- 準備品一覧：寝袋、洗面用具、普段着（厚着と薄着一式）、作業用服（汚れてもよいもの）、運動靴、フィールドノート（手軽で携帯しやすいノート）と筆記用具一式、研修マニュアル、土産
- 研修題目（キーワード）一覧：前後を問いませんが、研修中、下記の各点についてよく把握し、フィールドノートにその内容をまとめておいて下さい：地域構成（牧志）、地場産業、食文化、歳時記、世界観（弥勒世界観、ゆいまーる、にらいかない等の思想）、門中の構成、ライフスタイル、地域問題、うちな一口、島唄、ゆんたく、模合、拝所（御嶽）、亀甲墓
- 参考文献：下記の各 URL、書籍を予習資料として参照しておくこと：

沖縄県庁＝<http://www.pref.okinawa.jp>
 沖縄文化＝<http://www.culture-archive.city.naha.okinawa.jp/>
 （同上）＝<http://www.urban.ne.jp/home/ngsek/index-001.htm>
 史的背景＝<http://www.edogawa-u.ac.jp/~krskt/2001sotsuken/sugi/history.html>
 基地問題＝<http://www2.saganet.ne.jp/tyama/scrap/okinawa/okinawa00.html>
 （同上）＝<http://www.infoseek.co.jp/Topic/5/75/491/2294/7321>
 （同上）＝<http://dailynews.yahoo.co.jp/fc/local/okinawa-us-armed-forces/>

(同上) = <http://www.okinawatimes.co.jp/spe/kaizu20021105.html>
 年中行事 = <http://www.teruya-butsugu.com/gyoji.htm>
 琉球舞踊 = <http://www.geocities.co.jp/SiliconValley-PaloAlto/5962/ryubu.html>
 沖縄島唄 = <http://www5a.biglobe.ne.jp/~shimauta/>
 エイサー = <http://shinjuku-eisa.jp/>
 亀甲墓とその起源 = <http://www.d5.dion.ne.jp/~yama.m-n/kanzan7.htm>
 安里英子 (1999) 『琉球弧の精神世界』 (お茶の水書房)
 太田有紀 (2004) 『死を想い生を紡ぐ: 「沖縄死生観」 論考とインタビュー』 (ばさない BOOKS)
 長田昌明 (2002) 『おきなわ神々の伝説』 (わらべ書房)

研修の日程と経費 (参照資料 2)

日程

- 2月19—24日: 現地セッティング (研修生の受け入れ準備)
- 25日: 研修生 4 名的那覇入り, 那覇市内見学, 山原の宿舎へ移動
- 26日: 山原周辺見学, 農作業 (砂糖黍刈り, 山羊の飼育など)
- 27日: 米軍基地見学, 沖縄市&北谷見学
- 28日: 本部にてエコツアー (海洋生態系の体験学習)
- 3月
 - 1日: 南部見学 (糸満, 斎場御獄, ひめゆりの塔など)
 - 2日: 反省会, 帰省準備, 那覇宿泊先へ移動
 - 3日: 自由行動, 帰省

経費

36万円 (内訳: 交通費 5 万円, 宿泊費 2 万円, 食費 etc. 2 万円)

Images from the Field (参照資料 3)

Between February 25 and March 3, 2005, four students, Kumi, Misa, Tomo, and Yasuyo, visited Okinawa to enhance their knowledge of rich culture. Based in a village situated in the northern part of Okinawa's main island called Yanbaru, these students conducted ethnographic surveys with their own agendas in mind.



Students took deep and comforting breath out on a local beach at a low tide, greeting all sorts of sea creatures including some species they have never seen before. This was a moment of liberation from noisy and stressful lives in Tokyo.



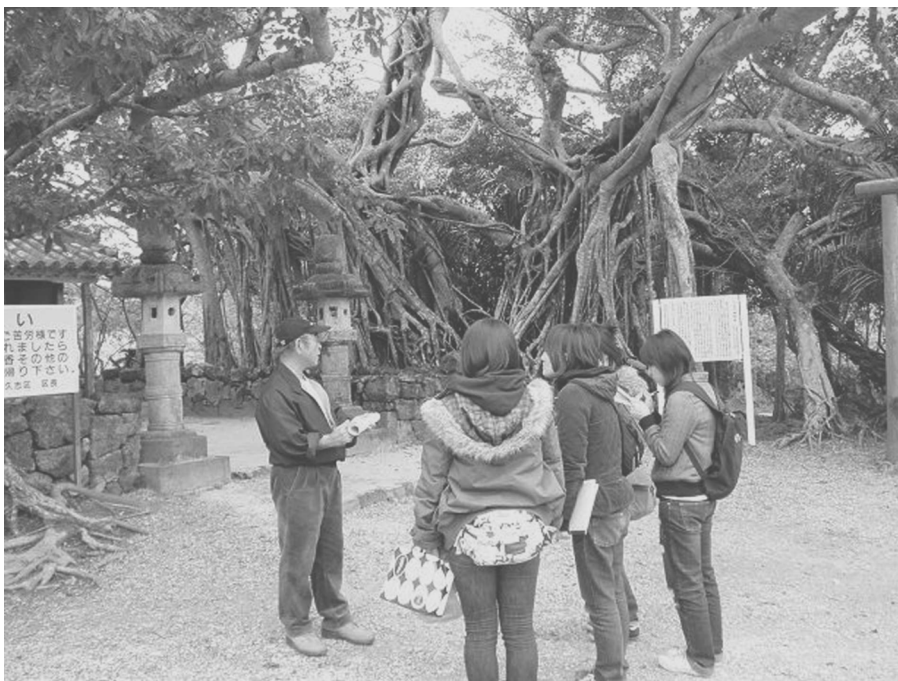
We took a long ride down south to visit one of the most well-known religious sites in Okinawa's main island, Seifa Utaki, where king-appointed female sorcerers called "kaminchu" used to offer prayer to the supernatural forces—the most famous of which is Amamikiyo, the goddess of creation. At one end of the prayer route in the forest was an open ground from which one could overlook the surrounding sea as well as an off-coast island called Yakushima. Okinawa's legend holds that Amamikiyo landed onto this island upon opening up the land of Okinawa.



At Nago Museum of Local Ethnicity, students peeped into a plethora of local goods including wax-replicated samples of Okinawan cuisine.



One evening, we went out to grab a bite and have chats at a local cantina. Since Tomo has been a practitioner of traditional Japanese folk music called “minyō,” we asked her to apply her skills to singing Okinawan folk songs. She did a great job!



Another daytime field study was conducted under the kind guidance of a local gentleman, Mr. Miyazato, who taught us about the sociohistory of a village in which we stayed.



One other major field study was conducted in Henoko, a place known for the building of a gigantic landing strip for U.S. military aircrafts off its shore. In order to resist a series of progressive off-shore constructions that are directed by the Japanese government, some villagers formed pressure groups in collaboration with activists from all over Japan. The drilling of coral reefs is causing irreversible damages to the local ecosystem. Henoko coast is recognized to be an invaluable habitation ground for dugongs, which are the endangered specie.



Students also enjoyed assisting sugar-cane harvests. Sugar canes turned out to be much more delicate than they had expected, and they needed to be treated with great care in order to avoid damages. In this sense, plant harvesting was much like taking care of human infants.



At Nakijin World Heritage Park, students observed the ruins of Nakijin Castle—what was once the northern center of the Ryūkyū Kingdom in the age of three powerful kingdoms (ca. 14th century).

参考文献

- Mead, Margaret (1978). *Culture and Commitment : The New Relationships between the Generations in the 1970s*. Garden City, NY : Anchor Books/Doubleday.
- Strathern, Marilyn (1987). 'The limits of auto-anthropology.' In Jackson, Anthony (ed.), *Anthropology at Home*. London and New York : Tavistock Publications. Pp. 16-37.
- Whittaker, Elvi (1992). 'The birth of anthropological self and its career.' *Ethos*, 20 : 191-219.